

忘れ語り、いま語り

つげ義春の訪ねた温泉は懐かしい

何年か前に、『みちのり』という雑誌の巻頭エッセイとして、東北の旅にかかわる文章を書き継いでいた。その連載の一編として、この、つげ義春の奥会津紀行に触れて書いたものである。

つげ義春は漫画家である。かつて、わたしがまだ大学生の頃には『ガロ』といった雑誌があり、つげはカリスマ的な人気を誇る漫画家であった。「ねじ式」や「紅い花」など、早熟でもなかったわたしはその難解な作風についてゆけず、夢中になることもなかった。つげの漫画のいくつかは、いまはわかるものもあるが、「ねじ式」などは夢の世界にでも紛れ込んだようで、いまだに無気味でわからない。

つげが大の温泉好きであったことを知ったのは、ずいぶんあとのことだ。『つげ義春の温泉』などというタイトルの本まである。『貧困旅行記』はつげの紀行文を集めた本だが、旅年譜や旅マップが付録として収められている。旅マップには、一九七〇年代を中心に訪ねた温泉の名前が書き込まれてあるが、東北の温泉であればかなり知っているはずのわたしが知らない温泉がいくつもあって、ギョッとさせられる。交通事情のわるい時代に、これだけの数の、いわゆる秘湯を総なめしていることには驚かされる。

つげはある時、古い旅の本で東北の湯治場の写真を見て、「あまりに惨めで貧しそうで」衝撃を受けた。心の奥深くのなにかが揺さぶられたような胸騒ぎを覚えた。それから、東北のひなびた湯治場を訪ねることが多くなったらしい。とにかく、徹底した下降志向の人で、世の中から見捨てられたようなボロ宿を求めて、ひたすら貧乏旅行を重ねたのである。

東北のなかでも、ことに福島県の奥会津の温泉をくりかえし訪ねていることが、旅年譜からは知られる。湯野上・柳津・西山・早戸・玉梨・大塩・湯ノ花・木賊・松枝岐と地図には並んでいる。つげはこれら会津の湯宿めぐりを素材にして、漫画を描き、スケッチ・写真や紀行文を残している。半世紀も前のひなびた温泉風景が、細密画のように描かれているイラストなど、とてもリアルでありながら、幻想的で、ノスタルジーを感じさせるものだ。

「もっきり屋の少女」という漫画は有名だ。おかつぱ頭の不思議少女が登場する。会津方言が使われているから、どこか奥会津の村が舞台とされたのかもしれない。ただし、つげ自身が種明かしのよう、この少女はフィクションだとどこかで語っていたことを思い出す。

また、「会津の釣り宿」という漫画がある。野尻川にある一軒宿の玉梨温泉に泊まる予定であったが、あいにく洪水のあとで宿は休業中であった、という。つげの撮った写真には、たしかに水上がりで壊れた「恵比寿屋」が見える。昭和45年5月の日付けだ。仕方なく、民宿に泊まることになり、その武骨で愉快的な主人とのやり取りがなんとも傑作というしかない。この民宿はすでになく、とか。

早戸温泉や西山温泉、木賊温泉の写真など、すでに失われた昔の風景が魅力的である。どこか奥会津の博物館で、「つげ義春の会津温泉紀行」なんて特別展示ができれば、ほんとに楽しそうだと思うにはいられない。